短歌の現在

月・月光の歌15首を読む

伊藤一彦

月の歌、月光の歌を十五首選んだ。「心の花」の歌人、「心の花」とゆかりのある歌人の作である。

幼きは幼きどちのものがたり葡萄のかげに月かたぶきぬ　『思草』　佐佐木信綱

「幼きどち」は幼い者どうしの意味。いつまでも話しこんでいる幼い者どうしの姿を歌ったのがまず新鮮である。ただ、といって下句は単なる背景ではない。地上の幼子と、葡萄棚の葡萄と、傾く月とが、ひとつながりのものであるという信綱の認識が大切な理解のように思う。

君よりもわれ罪深し照る月のあかきに佇ちてみ仏を怖る　『東帰』　川田順

いわゆる老いらくの恋に関わる作。「橋の上に夜ふかき月に照らされて二人居りしかば事あらはれき」もこの歌に先立ってある。順は苦しみ自殺を図った。月の光は心のなかの「罪」をあかあかと照らし出す力をもつ。

翅なき人にしあれば夜ふかく水に舟うけて月に遊べり　『微明』　新井洸

月夜の大空を飛びたいがそれはできぬのでと言いながら、舟を浮かべて水に浮かんだ月を愉しんでいる。上二句の軽口めいた言い方が面白い。十代の頃の洸はけっこう剽軽なところがあったようだ。

月の輪よなど涙せぬさきの世のうらみの数のわが歌をきけ　『踏絵』　柳原白蓮

白蓮の前半生は苦難の連続だった。後半生は幸福を手中にできた。宮崎龍介と運命を共にする行動を起すことによって。この歌は前半生の苦難の日々のなかの歌。自分の「うらみ」の心を誰も聞いてくれない、満月よおまえもわたしの心を聞いてくれないのかと。

戸をしめて月をあびたる家の前を人なつかしく我はとほるも　『紅玉』　木下利玄

二人の幼な子を亡くし、健康の衰えた妻との旅中の歌であるが、この歌は妻を先に俥で行かせ、自分はひとり暮れた道を歩いている場面。石見に向かっている。寂しさと人なつかしさがしみじみと伝わってくる。上の句の三つの「を」が少しもうるさくない、豊かな調べである。

この二夜月にまぢかう侍する星見つつ心はさびしさに居り　『白孔雀』　九條武子

『白孔雀』は没後に出版された第三歌集。夫との恵まれなかった結婚生活をやはり想像させる作である。夫に「まぢかう侍する」ことを願いつつ、そのことが叶わなかったことを照る月を仰ぎながら思っている。「夢ならず白き孔雀が夜の舞にわが魂さそふコスモスの花」。

月きよき秋の夜なかを崖に立ち白鬼となつてほうほう飛べり　『大和』　前川佐美雄

佐美雄に空中を飛んでいる歌は少なくなく、この歌もその一つ。高い崖に立った姿は月光に白く照らされ、「白鬼」に変身している。結句の「ほうほう」は声をあげて飛んでいるようにも思えるし、風を従え飛んでいるようにも思えるし、いつ地上に落ちるかもしれぬ軽さも。

月のひかり明るき街に暴力の過ぎたるごとき鮮しさ